

作業療法士と介護職の連携によるデイサービスの進化

神奈川県横浜市

ツクイ横浜瀬谷第二

機能訓練指導員 作業療法士 原 美華子

1 はじめに

当施設はデイサービス激戦区と言われる瀬谷区で今年開設10周年を迎えました。平成24年4月の法改正以降、看護師を機能訓練指導員として配置しており、お客様の機能維持に携わってきましたが、平成25年4月、作業療法士（以下OT）の配置により機能訓練が大きく変化しました。その結果、約半年間で高齢であるにもかかわらず、身体的・精神的・社会的機能面に目を見張るほどの向上が見られる方が続出しています。車椅子生活から趣味の老人会ゲートボールに復帰された方、車椅子でご家族と外出していたのに階段の上のレストランで食事を楽しめるようになった方などとてもここでは挙げきれません。

それらはどれも介護職の力なしでは実現し得なかったことです。生活介助をしながら機能訓練の状況をみている介護職が、その場でOTと相談し合って『訓練場面できること』をデイサービス内での『しているADL』に移行させ、問題点をまたOTにフィードバックしていく。OTはそれを受けてより生活しやすい動作の訓練を取り入れる。このような連携が日常的に行なわれることにより、当施設は“デイケアより生活に近く、在宅よりもチャレンジングな”特色あるデイサービスとして進化しています。

楽しいだけのデイサービスから、高齢者の可能性を開花させるデイサービスへ。当施設の取り組みを一人のお客様の半年間と共にご紹介します。

2 事例と取り組み

「一生車椅子と言われました。」というAさんは92歳。小柄で物静かな印象の女性です。介護度は3、主たる疾患は両側変形性膝関節症です。車椅子に高機能クッションを敷いて座りどこへ行くにも介助者に押ししてもらってという生活でした。もともとは隣接するY市で長年独居生活でしたが、高熱で入院中に歩けなくなって独居困難となり、娘夫婦と同居して1年ということでした。自宅は広く、車椅子での移動も支障はないとのことでしたが、「もう一度杖をついてでも歩けたらどんなにいいだろう。もう一人暮らしは無理だろうけど、前の家に帰りたいねえ。」というのがAさんの本心です。「まあ無理だろうけどね。」と最後に必ずあきらめの言葉がつかまりました。

車椅子の自操作方法をお伝えして促すと、上手に自操できます。見ていた介護職が拍手して褒めてくれると、「まあこのくらいは。でも押ししてくれる人がいるんだから。」と自操をしない理由をポツリ。続いて四肢の関節可動域や筋力などを評価すると、両膝に変形性関節症はあるものの痛みはなく、なんだか立てそう、歩けそうです。平行棒につかまって介助でゆっくり立ちました。

続いて手を前に、そして足を。さらにもう一步。「こわいねえ。無理だよ。歩けないよ。」と言

いながらも、OTの指示通り手も足も前に出ています。とうとう車椅子まで歩けました。「歩けたねえ。あー、やっど。」ホッとしたAさんに、「見てたよ、Aさん!」「すごーい!Aさんが歩いた!」介護職が次々と声をかけてくれます。Aさんは「手伝ってもらったもの。やっどだよ。とても歩けないもの。」と言いながら満面の笑顔です。

やがてAさんは見守りで平行棒内を歩けるようになりました。少しずつ両前腕介助でOTと歩けるようになり、平行棒は卒業。フロア内を両前腕介助で歩行訓練されるようになり、手すりがあれば踏み台昇降も可能となる頃、介護職からOTに『Aさんを一般浴にできないか?』との相談がありました。しかしAさんは今までずっと特浴です。Aさんに意向を伺うと、「そりゃ大きなお風呂に入りたいけど、無理だよ。」とのこと。早速OTがAさんの役になってスタッフ同士空の浴槽で手順や介助方法を試行しつつ相談します。OTが譲れない、浴槽の床に座り込むことによる膝への負担については、浴槽内の階段に座る方法を介護職が提案してくれました。Aさんと練習を繰り返す中、介護職にも何度か訓練場面に入ってもらい空の浴槽での入浴動作を行いながら、単なる訓練にとどまらない現実的な介助方法を確認していきました。毎回違う介護職と訓練することで、Aさんにも『誰と入っても大丈夫』という安心感と自身を持って頂くことができました。そして1回キャリー浴を行うことでAさんと介護職の心の準備とも言える段階付けとし、一般浴へ移行しました。浴槽につかり「大きなお風呂に入れるなんて夢みたいだ。」と笑うAさん。『訓練場面でできること』が『しているADL』になった瞬間でした。

また、T字杖介助でOTと屋内歩行訓練を繰り返し徐々に安定するようになると、「これだけ歩けるのに訓練だけじゃもったいない。デイに来たら車椅子を降りて椅子に座って頂いて、移動はT字杖で介助にして、疲れた時やお帰りの時にはまた車椅子に乗って頂けばいいんだよ。」と介護職。「介護の皆さんの手間や負担が増えますよ?」と心配なOT。「最初はそうかもしれないけど、そのうちもっと歩くのが上手くなれば逆に介助は楽になるんじゃない?」「車椅子で来られて椅子に乗り換える方は他にもいらっしゃるんだし大丈夫よ。」頼もしい介護職の後押しと、Aさんの「最初から椅子で過ごすのは心配。」とのご意見を受け、少しずつ椅子で過ごす時間を長くしていくことにしました。最初は午前中の機能訓練時から昼食前のトイレ誘導から戻るまで。次は椅子で昼食を摂って頂く。さらにおやつまで。こうして徐々に車椅子に乗らない時間を延ばしていくと、Aさんが「まだ車椅子じゃなくていいよ。」と言って下さることも増えてきました。

ほどなく来所時から退所時まで一日中椅子で過ごせるようになり、移動もT字杖介助ながら、すたすたと歩けるようになりました。

同居の娘様からも「歩けるようになるなんて。本当感謝しています。」「家の中では杖で一人で歩いています。」「夜も一人でトイレに行くようになりました。」と、感謝のお言葉を頂きました。この夏はご家族とAさんの念願だった独居時代の家に行き、一泊してこられたようです。

現在はAさんはデイサービス内では短距離なら見守り歩行ができるようになりました。一人で歩いては「危ないから一緒に行きましょう。」「あはは、見つかったねえ。大丈夫。家では一人で歩いてるんだから。」という会話が介護職との間で繰り返されています。機能訓練ではOTと屋外歩行訓練を行うAさん。「前に住んでいた家の周りを歩いたり、よく買い物に行っていた店に行ってみたいねえ。まあ無理だろうけどね。」新しい目標に向かって、92歳の挑戦は続きます。

3 考案

『デイサービスのお客様って、リハビリ難民かもしれない。』非常に失礼な表現ですが、入職後しばらくしてからのOTの率直な印象です。本当はもっとできるのに、もっと歩けるのに、残された機能を使えば今よりもっと生活の幅が広がるのに、専門的な訓練を受ける機会のないまま『もう無理だ。』とあきらめ、加齢による機能低下の波に飲み込まれつつある方々。お客様のためなら手間も工夫も惜しまない、残存機能を活かした生活介助のスペシャリストである介護職がいるのに、残存機能を引き出す役割を担う者がいない状況。ここにこそデイサービスに機能訓練の専門職が必要とされる理由があると考えます。

残存機能とは文字通り残された機能です。しかし、残された機能と今できる機能は必ずしもイコールではありません。今できる機能だけを残存機能だと思いこむことは、高齢者から可能性を奪う悲劇です。もちろん当施設のお客様方が皆様揃ってスーパー高齢者であるはずもなければ、OTが神の手を持っているわけもないのです。OTは基本的な訓練を一つずつ無理のないよう積み上げただけ、お客様は本来持っている残存機能が引き出されただけです。そしてそこに十分に引き出された残存機能を最大限に生かしてくれる介護職の力が加わった時、お客様のできる事は飛躍的に増加し、生活は大きく幅が広がり、可能性に期待する希望が見えてきます。ここにデイサービスの進化の本質と、今後のありゆく姿が見えるのではないのでしょうか。

4 おわりに

機能訓練の中心にOTが配置され半年。今までとはやり方が違う、動き方が違う、一日の流れが違うという変化の中、今までのやり方を知っている介護職・看護師・相談員・管理者にはそれぞれにかなりのやりにくさがあったと思います。OTもデイサービスでの立ち位置がわからず、右往左往する毎日でした。現在もトイレ、入浴、等の生活介助のタイミングと機能訓練の兼ね合いなど課題は多く、連携には試行錯誤の毎日です。

それでもプロとしてのプライドを持って協働するチームとして、私達はこれからもさらに『お客様のために』進化するデイサービスでありたいと思います。